あじさいの娘

森内美里

福祉センター行きのバスは空いていた。後ろ乗りの乗降口のステップを上がり、目の前に設置された一人掛けの座席に腰掛け、首筋と顎の汗をハンカチで拭いた。私を最後に乗車用の扉が閉まり、早々に発車した。モーターがうなり、車体のあらゆる箇所がふるえた。正午を回ったばかりで陽が高く、窓越しに靄のような白い光が差し込み、中空の埃の粒を明らめていた。なぜか煙草の臭いがした。間違いなく煙草だ。運転手が吸ったのだろうか。運転席の真後ろに紺と白のストライプシャツを着た老人が、その後ろに濃紫のレースを被った中年の女性がそれぞれ座っている。他に乗客はいない。老人の褐色の首筋には桃色の肉が隆起し、最初何なのかわからなかったがよく見ると腫瘍のようだ。明らかに誰でも気づく大きさで、ガーゼなど貼らないのかと思うが、通気性を保つよう医者に忠言されたのかもしれない。

途中「パルプ前」という停留所で十数名の高校生が乗車してきた。こんな中途半端な時刻に多くの学生が乗車してきたことに驚愕する。私がいたときとは時間割の編成が違うのだろうか。走り出す頃には、狭隘な車内が人間で満杯になった。「あっつ」向かって左のスペースを占拠した女子高生らの誰かが言うと、それを受けて別の誰かが「あっついわ」と小声で叫んだ。私の座席の脇息の上では、スティッチとウサビッチの大ぶりなキーホルダーが、パンパンに膨れ上がった水色のスポーツバッグに圧迫されている。バッグのほかにラケットも肩に掛けている。制汗スプレーの香料が強く匂った。「ていうか雅也ぜんぜん落とせないんすけど」そんな言葉が聞こえてきたので思わずその表情を盗み見た。屋外で活動しているのか、浅黒く日に焼けている。化粧をしていないのに張りのある口元を歪め、微細な唾の飛沫を周囲へ散布している。同級生かと思ったが違った。「キャラ設定からしてツンデレ枠じゃん？　全然いうこと聞かないわけ、誕生日のイベントとかでさ前振りとして好きなものとか聞くんだけど、いざ指定されたヤツあげると、だっせえ、とか言うし、なんか」「はいはいはい」「あー、あれでしょだから、好きな人は好きだよねそういうの」彼女は「ツンデレ」などという危ない単語を交えてごく普通のように話し続け、周囲も平然と相槌を打っている。「現実にいたら超うざいしょ」誰かが言い、そこで爆笑が沸き起こった。確証はないがおそらくうちのゲームだ。雅也をそういうキャラクターに設定したのは私だから。こういう子たちにも需要が行き渡っているらしいことは察していたが、ここまでとは思わなかった。部活に勉強で恋愛へ注ぎ込む時間がないのか、同級生や先輩や後輩や教師では飽き足らないのか。しかし彼女達も言っていたが、その手の話はタブーになっている感じはあるが、もちろん私達は業界一丸となり、現実の異性に飽き足らないというか、それはよく言えばということになるが、そういう層への供給としてグラフィック制作や外部ライターの招来やデバッグ作業に勤しんでいるわけで、つまりこちらの職務についても、この趨勢は無関係とはいえないのではないか。こんな爽やかなグループさえ、そういう層と見なしたマーケティングを行うべきなのではないのか。マーケティングなど受け持っていないが。

うちの会社は原画が二人、彩色が二人、ディレクターが一人、企画を私が担当というかなり最低限の人数で回している。昔は市場価格で一万円も躊躇わない本格的なゲームを年に何本も作ったが、業界の縮小に合わせ体力を削りに削って、というのは続々と社員が馘首されたということだが、結局今は、ソーシャルゲームという、い

つ泡が弾けるかわからない分野に注力し糊口を凌いでいる。音楽とテキストは外注でプログラミングは一部、たった一人の派遣の子にやらせているが経営が厳しいことはここ数年ボーナスをもらっていないことから推断しうる。もういい加減にあそこも長いのだが、いまだに電話一本で休日に呼び出されることも珍しくない。作業工程上、私のぶちあげる企画が通らなければ何も取りかかれないので仕方ないが、それにしても遣る瀬ない。昨日も土曜日だった。ディレクターの深津さんと二人しかいないと思ったが実際には派遣の子が出社していて来て早々「お疲れ様です」と言われた。三〇代くらいかと思うがいつも化粧が濃いのでよくわからない。尋ねることもない。漏れそうだったので荷物を置いてトイレに駆け込むとなぜか一緒にとびこんで来た。「最近どう?」と言うと「別に愚痴じゃないんですけど考えたらネイルいじるのも無理なんですよねここ、愚痴じゃないけど、それがちょっとなー、っていうのはありますけど」と彼女はいきなり愚痴を言い始める。「そうなんだ?」確かにデータの打ちこみなぞ実態として目ながディスプレイとキーボードにかかりつけなのは相違ないが、しかし派遣の人らが担当するのは打ちこみにおよそ類似した業務ではないか、つまり、単純でありながら煩雑な、与えられた時間をただ一つの目的へ費やす業務というか。「甘貝さんは?」「え?」「いや、そういうお店行かれないのかなーと思って」彼女はなぜか屈み込むような体勢で私の両手にぐっと顔面を近づけた。見てくれの問題でささくれの処理はしているし癖でいつも深爪気味に切り揃えているものの美麗とは言い難い私の爪に、彼女は他人の家の冷蔵庫でも開けるような儀式的な動作で指を這わせる。「あっ、なんだなんにもやってないんですね、なんだ」いきなり手を離すと「ごめんなさい」と言い添えてそそくさとトイレを出ていった。なにが「ごめんなさい」なのだろう。私は液体石鹸で両手を手首まで洗った。

「お疲れ様です、お先に失礼します」午前中で終わりなのかフロアでパソコンの電源を落としていた彼女からそう言われるついでに深津さんに呼び出されていると告げられ、その足でそのまま専務室へ向かった。扉を開けると強烈な冷気が私を包み、入口の脇の、エアコンの温度設定を確認すると一八度になっていた。「正直なところリアリティがないんだよね」「はい」「やっぱり妹がいきなり二四人できる、てのはちょっと厳しくない? 狙いは理解できるんだけど、ッふう」深津さんが息をついた。私が出した企画書を持っている。今夏に入ってからどういうわけかワイシャツの上にサスペンダーを装着して出社してくる。奥さんに言われているのだろうか。「そうですね、人数がやっぱり」「それもなんだけど、一応『多人数プレイモード』が売りじゃない、あまり他の部分でアヴァンギャルドになると、ッふ」多人数プレイというのは、プレイヤーが複数なのではなく、最終的に恋愛関係に発展する相手方が複数であるという意味だ。プレイヤーと攻略対象のキャラクターとは言うまでもなく、遊び方次第ではキャラクター同士の交流も深まるため、上手く転がすと終盤の年齢制限シーンでレズセックスや3Pが勃発する。「そうですね」「そうなんだよ、このアイディア生かしたいから余計にね」「ありがとうございます」そうだろうか。これは、どういう意図で言っているのか。企画を思いついたときのことなど何も覚えていない。「うちとしてもここらでヒット飛ばしたいし」深津さんは上目遣いで私を見たが見つめ返すとすぐに眼を逸らした。「甘ちゃんとも長い付き合いだから」と呟いてから回転イスの背面に凭れ、イスが大きな音を立てて軋んだ。「じゃあもう少し人数絞る方向で、あと設定も変更して」「んんんそうだね、どうなんだろうね、なんかいい舞台ないかな、言っても男一人に女の子が馬鹿みたいに群がってるシチュが欲しいわけじゃないやっぱり、そのへんが」「そうですね、でしたら学園ものとかはありえるかと思いますけど」「え?」「男子が数人しかいなくて、その他のクラスメートが全員女子という状況でしたら、まあ、美術系の高校とかでしたらありえるかなと」机越しに数メートル離れているしエアコンで空気は循環しているはずだが乾いた汗の臭いがこちらまで届く。ワイシャツの襟首に濡れた痕跡が残っていて、主にそこから漂っているようだ。「へえそうなんだ。それで?」「男子はプレイヤーと、プレイヤーへのアドバイザーで固めれば問題ないかと思います。女子はいかにもそれっぽい不思議ちゃん系の子とか、勘違いで入ってきた体育会系の子とか、美術系という要素を軸にして個々のポジションを設定していく方針でどうでしょうか」「実際そうなの?」「はい?」奇妙に素朴な口調で訊かれ混乱したが、リアリティ云々の文脈がまだ生きているらしい。つまりここで引き下がると今まで喋った構想がなし崩し的に却下される。「いえ、はい、そうですね。私が、私の知人がそういう高校に通っていたんですが、男子はやっぱり、本当に数えるほどしかクラスにいなかったという話は聞いております」「へええ」深津さんはお茶請けの菓子をかじると、耳鼻科で鼻水を吸入するような音を立てて緑茶を啜った。菓子は妹から貰ったものを私が職場に持参した。上海の名産品で包装紙や小分けのパックに中国語の説明が列記されているが、判読不能なので具体的に何を食べているかは不明だ。それにしてもなぜ持っている

のか、配ったのは一か月前だが、保存しておいたのか。「いいね、話聞く限りだといい感じなんだけど、うんでも、こう、もう一押し欲しいんだよね、ベタでもいいから」茶飲みからは湯気が立っている。この暑いのによく飲めるものだ。「なんか、なんだろうな、せっかくだからキーアイテムとか欲しいな」「キーアイテム」「うんだから、主人公と彼女が遠い昔に交わした約束の、的なモノとか、これもベタだけどね」「なるほど」「とりあえず週明けからライターさんに作業入ってもらいたいんで、それまでにコンセプトまとめてくれる?」「はい」「一応僕のほうでもチェックするけど、アレだったら先方に直接渡しちゃっていいから」「はあ」私は微笑した。自分で書きたい。プロットも明示していないのに勝手に書き始めたあげく締め切りを超過し納期を遅らせ、他人に毎年コミックマーケットの荷物持ちを押し付ける相手とは、本当は関わりたくない。「とにかく、大事なのはリアリティだから、何か身近なエピソードとか、なんでもいいんで探してみてください、とまあそんな感じすね」しかし安い委託料でやってくれるのだから文句も言えない。とにかく何かしら出さなくては。というかもしかしてこのためだけに私は呼び出されたのか。メールで伝えればいいではないか。パワハラで訴えるぞ。「ところで、ついでだから昼飯一緒に食わない?」「いえ、すみません」「えー、いいじゃん」「いえ、本当にすみません」「あ、そう、じゃあお疲れ」「失礼いたします」私は速やかに退出し、退社した。これが土曜日のことだ。

その日の夜遅く、妹からメールが来た。妹はなぜ私のメールアドレスを知っていたのか。開いてみると、明日休みだろうから父の見舞いに行ってくれという趣旨のことが書かれていた。向こうで自分も待っている、医者と看護師の説明を聞きたい、昔話もしたい云々。入院場所をマピオンで検索すると「上大山福祉センター」なる施設が出現した。県の認定によるリハビリテーションセンターという名目で、おそらく父のように手術や疾病などで失った身体機能を恢復させるのが目的なのだろう。もちろん行かざるをえないし、実父なのだから、行きたい。日曜日を引き換えにでも。

長年にわたり不摂生だったせいか、私は習慣的に、少し時間が空くと場所もうるささも関係なく眠ってしまう癖がついていて、しかも車内ではよりにもよって、あんな相手、の夢を見た。夢の中でも私はフリーマーケットだかで荷物持ちをしながら相手の後ろを附いて回るのだったが、しばらくしてそいつの両耳から、蔓のようなものが伸びているのに気づいた。相手が前進するのも厭わずそれを掴むと、繊維質の感触でやはり蔓だと確信した。細いが青やかで張りもあって瑞々しい。私は思いきり引っ張った。耳穴から蔓は、掃除機のコードのように際限なく伸びた。どれくらい手繰ったかようやく抜けて、空洞と化した穴からは空気が漏れ、相手はしゅるしゅると萎んで、ついに皮一枚になってしまった。わざとではない。疎んでいるとはいえこの歳で逐一他人に死んでいただきたいと願う体力はない。かといって逃げたら後で逮捕されたときに逃亡の理由を説明できない。待つよりほかない。待って、正直に所業を打ち明けるべし、空気を抜いただけ、と。しかし待てども警察の人間は来ず、そもそも見渡せば装いはフリーマーケットなのに人間の気配が皆無であって、周囲の景色が藤色に染まりかける段になって甚大なわびしさを感じているとようやく目が覚めた。

さきほど車内で見掛けた老人が目の前に立っていた。腫瘍は黒々とした光輝を放っている。糸屑のような白髪を撫でつけ、汗を掻いている額は蒼白い。いきなりの事態に無言で固まった。老人も無言だ。バスは完全に静止している。終点に着いたのか、周囲には私と老人と、ガラスの仕切り越しにこちらの様子を窺う運転手しかいない。運転手は腕章を引っ掛けたほうの腕でハンドルに凭れ、そのまま上半身を乗せ、故意ではなかろうが顎でクラクションを鳴らした。ビッ、という音が一瞬鋭く空気を裂いて、彼は反射的に、引き攣れのような動作で背を逸らしたがまだ私を見ていた。老人も私を見ていた。老人の眼は大きく見開かれたまま凝固し、眼球は今にもこぼれ落ちそうだ。私は立ち上がり、老人を無視して、車体前方で開けっ放しになっている、二つ折り式の降車口のステップを降りた。けたたましい蝉の声とアスファルトが放つ熱気に触れてから、ひょっとして起こしてくれたのではないかと思い至る。それ以外に目の前へ立たれる理由がない。しかし待てども老人は降りてこない。覗き込むと、運転手と何やら口論をしていた。「だからお金ないんだったら、降りれないから、ネ、犯罪だから、警察呼ぶから、ね?」という声が聞こえた。口論だと思っていたが、口を利いているのは運転手だけで、老人は俯いていた。私は老人の喉元を見た。喉仏がなかった。降りてきたステップに再び足をかけようとすると、運転手が手元のボタンを操作して降車口を速やかに閉めた。

受付に辿り着くと面会用紙に年齢と氏名を記入し、《入院者さまとのご関係》では《親族》に丸をつけ、《面会理由》には《見舞い》とだけ記して提出した。渡されたカードを首からぶら下げ、直近のエレベーターで三階へ昇った。病院ではなく福祉センターだが、病院と同じく薬剤の臭いがした。清潔を保つためというより、人間が

いる気配を清潔感で相殺しようとする意志を感じる。途中、廊下で車いすに乗った女性とすれ違った。職員に告げられた番号を頼りに個室の扉をノックすると「はい」という妹の声が聞こえたので「みーちゃんだよー」と言ってみた。「あっ、みーちゃん?」妹は扉越しに返事をすると速やかに扉をスライドさせた。そして私の姿を確認するや「やーんみーちゃんひさしぶりー」と言った。妹は都内の病院で看護師をしている。私と同様、二十年近く同じ職場に勤務しているが年収は私の三倍を優に超える。個室の内部には二つのベッドが置かれ、それぞれが淡緑色のカーテンで仕切られている。祖父は手前のベッドに寝ていた。カーテンを引くと、血色の悪い父の顔が上半身を起こしてこちらを睨んでいたので思わず後じさりした。「お父さん、みーちゃんお見舞いに来てくれたよ」妹が補足事項のように言い足すとようやく表情が和らいだ。「ああ、みさき来てくれたのけ? おら、おら」アアッとか細い声で絶叫し父は嗚咽した。「おらこんな様になって、ああ情けねえ、情けねくで、涙が出てくるヨォ。ほら、こんな様に、こんな、もう一人ざ歩げねぐなるなんでな、人の一生、なにが起こるがわからんもの、こんな、情けないなりに、もういやだ、おら頑張るからな、まゆみに散々言われだからな、おらがこんななっだのは、なっだのは、おらが歩かなぐなったからだ、セカイイチが潰れて、ずっと歩いて買い物行ってたのにな、行かなくなって、んで歩けねぐなったんだ、ああ、もう情げね。とんだ、恥曝しで、こんなとこに送られでな、しゅずゅつすてよくなるなんてな、そんな甘くないがらな、おら頑張って、がんべって歩げるようにな、なるがらな、なるがらな、ああ」

「肛門が弛緩してるんだよね」と妹は言った。「自由に排泄ができないからDパンツ穿かせてるんだけど」Dパンツ?「それって、その、手術の後遺症ってこと?」「ていうか、なんだろうな、あの、神経って手を施したら即座に恢復するって性質のものじゃないのね、じわりじわりなの、だから後遺症じゃなくて、恢復していくのはこれからリハビリしていって、それで徐々にだから」溜息をつき、膝に乗せた鞄を撫でた。鞄はヴィトンで、金色のチャックと南京錠が二つずつ附いていた。そこは個室の外の廊下の端だったが、私と妹の会話はなぜかそっくり父に聞かれている気がしてならなかった。「そっか、別に歩けないわけじゃないんだね」「そうだよ、だからまあ、心配いりません」「うん、泣いてたからびっくりしたけど」ああそうだねと妹は言った。さつまいもの色をしたリップを濃く塗り、グレーのアイシャドウを入れている。睫毛も整えてきたようできれいにカールしている。これから仕事かと尋ねると「そうだよー」と笑った。笑い返していいか迷ったが、聞けば勤務体系が異なるだけで、日曜日が出勤といえど週休二日は確保されているらしい。看護師にも役職があるらしく、妹は何か、「理事」という名称がどこかに入る肩書きだったと思うが失念してしまった。「そっか、大変だねお仕事」「まあね。だからみーちゃんにもお父さんのリハビリ手伝ってもらわないと」私は妹を見た。妹は千葉の市川塩浜で父と同居している。一〇年ほど前に離婚して、五年前に一度同じ病院の精神科医と再婚しまた別れたので、今は独り身のはずだ。私は父と暮らしたことは一度もない。大学へ入るのに上京して以後、数年に一度顔を合わせる程度だった。「手伝うってどういうこと? 一緒に住むってことじゃないよね?」「違うよー」と妹は言った。「私も忙しいから、たまには病院に来てほしいってこと」「そう」たしかに、下手をすれば彼女のほうが多忙なのだから、私も幾分かは交通費と時間を負担すべきだ。

しばらくその分担の内実を相談していると医者がやってきた。背が高く、黒縁の丸眼鏡をかけていて、若いが頭部が砂山のようにきれいに禿げ上がり頭皮に浮き出た脂に蛍光灯の光が反射していた。傍らに看護師を伴っている。女性だったが妹とはまったく似ていず、むしろ私に似ていた。顔の面積が広く、眼や鼻や唇が矮小で、凹凸の概念が希薄だった。「はいッじゃあ、おちんちんに管入れますからねッ甘貝さん」そんな声が聞こえてきた。父は身をよじりながらベッドから下半身を投げだすと、寝間着のズボンをずり下げ、その横で妹が襁褓のテープを剥がした。妹によれば、父はこれから「導尿」をするらしい。先程そう聞いた。「神経が麻痺してて足腰も弱ってるし、排泄全般が上手くいかなくなってるのね、放っておくと膀胱にオシッコが溜まって炎症起こしちゃうから、外科的に処置しないといけないわけ」「それは、周りの人がやるの?」「いや、やり方覚えさして本人にやらせるつもり。四六時中は一緒に居れないしね」初めは父にやらせる算段だったらしいが、手元がおぼつかず、管の先端は中々性器の先端へ没入していかない。やがて看護師が父の股間の前にしゃがみ、作業をこなし始める。予想をはるかに超えて太い管を、茶褐色の尿道へと沈める。父はそのたびに、痛みからか激しく身をよじったが、抵抗はしない。看護師は手元を隠してくれているが指の隙間から様子が垣間見える。私がときおり父を宥めている間、妹は医者と話をしていた。「すみません、伺うのが遅れてしまいまして、それでどうでしょうか、父は」「いえ、お元気そうですよ、隣の方とも仲良くなられたみたいですし」「はあ、あの、そうではなくてですね、その、

父は」「あ、導尿ですか、そう、ですね、うーん、まだちょっと、ですかね」「まだちょっと、というのは？」「いえ、お独りでやっていただくのはまだ厳しいかなと」「そうですか」「まだちょっと、練習が」「練習」「はあ、あの、こう言ってはなんなんですが、お歳を召してらっしゃいますから、ちょっと」「え？」「ちょっと、その、理解力があまり」「ああ、そうですか？　そんなことないと思いますけどねえ」語尾が尻上がりになっていて、妹は私に言ったようだった。父は薄い、肉の落ちた四角い肩を揺すり、呻いた。相当に痛いのか、呻き声は途切れ途切れであるものの、かなり激しい。麻酔を使わないのだろうか。「大丈夫だから」私は言ってみた。父は看護師の手許を一心不乱に凝視している。鼻梁に浮き出た汗が唇まで滑り落ち、代赭色の舌で嘗めとった。その動作で私には父が一瞬、動物のように見える。そうなのだろうか。父の理解力とやらは、そういうことになっているのだろうか。「そんなことないでしょ？」妹は語気を強めて尋ねた。医者に対してでも、私に対してでも、看護師に対してでも、父に対してですらあるようだった。「うん、まあ」どう考えても彼女のほうが判断がつくはずだが、事情をよく知らない私に対して、だからこそ公正な見解を期待しているのか。「大丈夫だと思いますよ、さきほども普通に会話しましたから」そうだ。確信を抱いて、あえて医者に向かって言ったがしかし医者は私を一瞥だにせず妹へ向けてDパンツの話を始めた。父がもう一度呻いた。

三時半に折り返しのバスが来るはずだから、病室にいられるのはあと三〇分が限度だ。もちろん最終ではないがそれ以後間隔が空いているので、逃がすと七時ごろまで病院にいなくてはならない。仮に七時一五分の便で帰路に着けば実際に帰宅するのは一〇時頃になる。正直なところそれよりは早く帰りたい。今日中に済ませたいのだ。深津さんは週明けでいいと言っていたが、先方がメールを確認する頻度を考慮するにさっさと提出するに越したことはない。身近なエピソードを、と言われたがそれは捏造できる。バスの車内の女子高生ではないが、ユーザーはあくまで、都合のよい、見かけの都合の悪さをも含めて都合のよい恋人を、求めているのだ。それとも、避妊具程度は出すべきだろうか。

医者が睡眠剤を点滴して去るとすぐに父は寝息を立てはじめる。病床の傍らで私はパイプ椅子に座り妹は立っている。「にしても、ホントみーちゃん久しぶり！」「まーちゃんも」「元気だった？　お父さんと会うのも久し振りだよね？」「うん、まあ」手術の報せを聞いたのは半年ほど前だったが、順番待ちが重なり先月になってようやく済んだから実際は入院して半月も経っていないらしい。「その間ずっとお見舞い来れなかったから」妹は申し訳なさげだ。「まあ、それは私も一緒だから」「でもみーちゃんと違って私はずっと一緒に暮らしてるわけでさ、ずーっと一緒にいたのに、ちょっと、やっぱりね」突然傍らから異音が響いた。器材の異状かと思ったが父の鼾だった。父は入れ歯を外した黒い口腔をぽっかり空けて眠っている。「くこおおお」と音を立てて胸元を膨らませしぼませる。「こうしていると」突然妹は言った。「思い出すよねえ、キタゴウのほうで、お父さんと、お母さんもいて、皆で特急見ながら」妹は何を思い出しているのだろうか。確かに私の実家は線路沿いの団地で、まだ親戚が暮らしている。「姫路の伯父さんもいた気がする」「そうだね」伯父は私が幼い頃は姫路にいて連絡もろくによこさなかったが、中学生になったとき唐突に実家に身を寄せた。二年前に亡くなるまで、身を寄せてからわずかな期間以外働かず自室からも出ず、初めは同情されていたがやがて疎んじられ、食卓で彼のことが話題に上ると唐突に雰囲気が暗くなったり明るくなったりし私はそのたびに無言で食べ物をつついたが、上京する際にはほとんど、存在しない人間として扱われていた。「それで、そう、皆で特急見ながらね、こうプアアーって走ってくの見ながら、なーんかいきなりお父さんが言ってたんだよね、母さんと父さんは駆け落ちだったんだ、とか」「え？」私は耳を疑った。私は祖父も祖母も既に亡くしているが、独り立ちしてからも法事やら何やらで散々会ったし、言うまでもなく高校生の時分まで実家で一緒に暮らしていた。もちろん妹も。何を言っているのか、何の話と混同しているのか。しかし「お父さんね、お母さんにあじさいのブーケプレゼントしてね、こう、結婚してくださいって、そんな言い方しなかったろうけどそんなこと言ったんだって」と力説されて私は「そうだね」と返事だけした。あじさいのブーケ？「それいつの話？」「あたしがたぶん三歳かそこらの頃だから、みーちゃん小学校に入るか入らないかぐらいじゃない？　なんかねえ、すぐ前の日に七五三やった記憶はある」それは記憶にある。私の最後の七五三ということで、父は近場の神社ではなく、県の中心にある同じ系列の本殿まで母に車を走らせた。写真の撮影が終わり、金太郎飴を棒のまましゃぶっているときに転倒し、借り物の着物を泥と膝の出血で汚した。激昂した父に頬を打たれ、そのまま路地にへたりこんで尻も汚した。すると今度は母が怒号をあげ、父の私への仕打ちを詰った。妹は泣いていた。通りすがる家族連れは、必ず一度、父母を見てから、私を見、また父母に視線を戻すのだった。二人はもつれながら、

競うように声を張っていた。「そうなんだ、すごいね」「でもあじさいだよ？　お父さん花言葉知らなかったんだろうなあ、みーちゃん知ってる？」「ううん」それにしてはおかしいのだが。「冷淡とか浮気性とかみたいな意味らしいよ、実際、ダメじゃんそんなの、ていう、贈っちゃダメでしょお！　ていう」「そうなんだ」

その話をひとしきり聴き終えたときに病室の扉が開いたらしかった。というのも合板かつスライド式だからかほとんど音がせず、向かい合った妹がそちらへ身を乗り出した動作で気づいたからだ。「あっくん」妹は言った。あっくんと呼ばれた若い男の子はカーテンを暖簾のように除けて病床まで来ると、妹と何か囁きあってからこちらを見て「どうも」と聞き取り辛い声を発した。誰だ。誰かわからないまま私が頭を下げるより早く、妹は彼の肩を抱いて言った。「これうちの息子」

私は戦慄した。妹の離婚の原因は、子供ができない、だったはずだ。妹に原因があるのかそれとも相手方は知らないが、とにかくそうだった、はずだ。数年前の母の法事で「ぽっくり逝く前にせめて初孫を抱きたい」というようなことを妹ではなく自分の知人に呟いた父に妹が怒鳴る光景を目撃して、妹と若かりし母の顔立ちがそっくりなことに唐突に気づいたのだった。それが見知らぬ男の子を、息子だという。本人は名乗っていないが妹がそう言う男の子は、よく見ると二〇代の風体であって、たしかに二人の年齢の懸隔は、そういった間柄でしか説明できない気がした。顔立ちは似ているともいないとも言いがたい。両人とも二重で、鼻の形はそっくりだが顎周りの骨格が全く違い、妹はほくろが多いが男の子には皆無だ。男の子はすみれ色のポロシャツにジーンズを穿いており、黒縁の眼鏡をかけている。少し眉を剃っているが、髪は染めていない。「もっしー、どうしたの？」妹が無邪気に尋ねるので急いで笑みをつくり「すっごおい、そっくりだね！」と有無を言わせない明朗な声音をぶつけた。「そうでしょ？　言われるんだよねよく似てるねって、ねー？」「はあ」あっくんは妹と全く眼を合わせない。「よろしく！」前の夫との子供かと確認したくてたまらなかったが我慢して手を差し出す。「ほらあんた、伯母さんと握手して、初めて会ったんだから」あっくんは妹が言い終わるより早く握手を済ませ手を離すと、「台所になだ万の弁当あったでしょ？」「あー」「MRからもらってきたの。食べた？」「まあ」「おいしかった？」「普通」「普通って、あんた何でも普通ねーっ」「あー」などと妹に相槌を打っていたが、不意に「ていうか出てるわ」と言い残し踵を返すと、本当に廊下へ出ていった。「ごめんね」見届けてから妹が言った。「あれもお祖父ちゃん子だけど、ちょっと何考えてんだかわかんないんだよね、大学も休み入ったら寝てばっかりで、サークルは一応入ったみたいだけど、あんまり友達もいなそうだし」「大学生なんだ？」私はすがりつくようにして言った。「そう」妹はさりげなく大学の名前と学部を公表した。私も知っている私大で、以前ジャニーズの子が入学したニュースをヤフーで見た。「すごーい」一応言っておくと妹は唇を噛めながらはにかんだ。子供。本当にいたのかもしれない。できたのかもしれない。私が知らなかっただけで。知らないが。「いいなあ、私も子供欲しい」と言っておく。ただし少し前に、女性二人のカップルが養子を貰いその子と三人で暮らすという映画を見て、かなり本気で閉経期を迎えてしまった事実を悔やんだのであながち嘘でもない。にわかには信じ難いが、私は五十路に近づいているのだ。今まで何をしていたのだろう。自分と派遣のプログラマーと仕事で二〇年越しの付き合いの中年既婚男性と顔なじみの外注ライターで、私の世界は完璧に完結している。月の残業はどう見積もっても過労死のラインにほど近く、週に一度は終電を逃し土日を設定の案出に費やし、これまでいくつか中規模のヒットタイトルの原案を出してきてそれなのに給与は平社員の扱いで手取りは二三万ボーナス無し。私は何をしているのだろう。

いや、そもそもこうやって考えること自体が一種の甘えなのだ。確かに手取りは低いかもしれないが、そして「やりがい」という言葉に頼るには遅すぎる歳だがしかし、いくら成功しても一度の失敗ですべての信用を失うのが当然な業界で、低い手取りがゼロにならないそのことそのものが僅少な僥倖であって、これ以上は、望むべくもない。この歳で仕事が入らなくなったら、解雇となったら、私は間違いなく生きていけない。それは人生の目標がとかいうことではなく、物理的に、無理なのだ。それはよくない。私は、頑張らねばならない。お前は死ねと、私は宣告されていない。こういった生活をしていて、このような手筈で生きていて、許される人間なのだ。

「あのーすみません」トイレへ向かうために病室を出ると、壁に背を預けてあっくんが廊下に立っていた。手にスマートフォンを持っている。「ここって、福祉センターじゃないですか」「え、うん」「一応病院じゃなくないですか」「そうですね」私は応答した。じゃなくないですかって何だ。「あのー、でも看護師さんとか医者の人とか普通にいるじゃないですか、病院じゃないけど」「うん」「だからケータイとか、使っていいのかっていう」「ううーん、まあ、どうなんだろうね」連絡を取りたい要件があるのか。たしかに病院ではなく、リハビリテー

ションに主眼を置いた施設であると聞いているが素人には病院にしか見えず携帯電話を使って許されるような雰囲気ではない。外に出て電話すればどうかと思い、言おうとした私を、しかし彼は完全に無視してスマートフォンの画面を高速で操作し、あっというまに耳へ押し当てた。「アィっす！　お疲れさまっす、え？あー、いや、申し訳ない、なんか知らない電話からだと出ないことにしてるんだよね、え？　んーあーはい、あー、あー、あの件？　あ、はい、あのー、あれか、なんだ、マル秘色情めす市場？」大きな声が廊下中によく響いた。しばらく会話しているといきなり「んはははは」と更に巨大な音量で笑った。「ああああそうなんだ、マジか、やっぱいなそれ」歩行器を使い、手すりを掴み看護師と一緒に眼の前を歩いていた老人がこちらを睨んだ。看護師も睨んだ。私はトイレへ逃亡し、後ろからあっくんの「うんま、なんとかするから、いや大丈夫大丈夫、はい、わっかりましたー、あい、お疲れさます、じゃ」という声が聞こえてきて、それを最後に再び、静かになった。

戻ってくると妹が消えていた。代わりになのか、あっくんが同じパイプ椅子に腰を下ろしており、尋ねるより先に「あ、母なんすけど」と臀部を動かして言った。「今ちょっとトイレ行ってるみたいなんで」「え、嘘」だってすれ違わなかったよ、と言ってみたが彼は無視した。知んないよ逆方向のトイレ行ったんだろそんぐらい分かれよ。私はあっくんの後ろ姿を見た。父は先程と違い、寝息にノイズが混入したような鼾を掻きつづけていた。見様によっては危篤だが、あらかじめ話を聞いて来たのか、あっくんは容体に頓着せずカバーのついた文庫本を読んでいる。シャツの襟首は垢で汚れていた。身長は高く一見して恰幅がよさそうに見えるが、丸めた背は肉が薄く、腕や頸も細くて短い。痩せていず肥ってもいないが、健康的な体型には見えない。顔はどちらかといえば幼い印象だったが、後ろ姿はむしろ老成している。まるで別々の身体と頭を、後からくっつけたようだ。いったいどういう育ち方をすると、こういう体格の人間になるのだろうか。何か事情があるのかというとそういう気配でもなく、ただどこかしらが微妙にいびつで、不安な気持ちを与える。先程は本当に妹の息子なのかと疑心を抱いていたが、今見ると本当に人間なのかとさえ思えてくる。それにしても、なぜここまで自分の祖父を気にかけないのか。義務で座っているのか。鼻の詰まったような苦しげな声にも反応せず、本のページをめくっている。妹はああ言っていたが、明らかに心配してなどいない。「もうちょっと心配しなよ」と言えば頸だけでこちらを向いた。だいたいさっきの態度もそうだ。いかにも暗く、言葉遣いも汚く、自分の殻に閉じこもり、他人とろくに会話もできないくせに、顔見知りにだけは居丈高で軽佻浮薄で、それは自尊心が強いからだが、まったく鼻もちならない。こういう学生でも社会に出れば一端の大人のような顔をするのだろう。私は派遣の女の子のことを考えた。少し変わっているが、この子よりはよほど気立てがよい。そもそも、こちらを向いたこの眼が、気に入らない。眼に表情がない。嫌々来たのだと一目で分かる。私は父に同情した。「さっきもそうだけど、病院でケータイいじっちゃいけないってぐらい大学生なんだからわかるでしょ？」あっくんはしばらくその姿勢のままで固まっていたが、私が言い継いだのに呼応するかのように立ち上がると、カーテンを引き、音もなく病室を出ていった。これは、更年期だろうか。妹と気まずくなると困る。とはいえ、そもそも、仮にもし、あれが、自分の子供だったら。あれが二十数年、夫と離別し、死に物狂いで労働した結果育て上げた結果だとしたら。不遜だと気づきつつ、私は妹に同情した。そして少し考えた。給料が安かろうと、それを間違った要素に費やせば元も子もないわけで、自分はひたすらその安月給で、企画を出して、腹の突き出た上司をいなし、現場をろくに知らない二流ライターを焚きつけ原稿を書かせて、納得のいく作品づくりに邁進していれば、とりあえず構わない。

三時を回った。私はエレベーターで一階へ降りると病棟に入っている薬局へ向かい、店員に尋ねてDパンツを二つ買った。マクドナルドでフィレオフィッシュバーガーを飲食し、次に花屋に寄った。「夏の花っていうと何がありますかね、その、ユリとかじゃなくて、病室に置いても大丈夫な」「あー、そうですねえ」茶髪を茶色の髪ゴムで結った、女子大生のような身なりの店員は少し店内を彷徨ってから「これなんかいかがですか？」と小振りな鉢を持ち上げた。ビニールを被せてもらい、会計を済ませてから小脇に鉢を抱えた。私は、父に鉢を渡す場面を想像した。父は喜び、滔々と昔話を語り出す。他界した母にあじさいのブーケを渡す。結婚を申し込む。バラだのガーベラだのではなく、あじさいだから、いいのだった。リアリティが、ある。

扉の前に来ると、同室の人なのか車椅子に乗った中年の女性が現れた。隅に寄ってから中へ入り、カーテンを開けるとパイプ椅子には誰も座っていなかった。祖父はベッドの上で起き上がり、口を動かしていた。入れ歯を捜しているのだと鉢とDパンツを置いてから気づいた。枕元にあったそれを手渡すと父は顔の皺を正中線上に蟻集させて「ああっあった」と驚いたように言った。顔だけでなく首筋や腕や手の甲や胸元などあらゆる場所に

皺が寄っている。「まーちゃん知らない？」と訊いたが「知らん」と言う。私は椅子の上に置いていた鉢を両手で抱え、「お父さんこれ、あじさい」と言って父の眼前に掲げた。父は花を見た。花の中心には白い蘂が鈴なりになって伸びていた。「お父さん覚えてないと思うけど」私は喋りつづけた。「これね、まーちゃんが言ってたんだけど、私は憶えてないんだけど、お父さんが昔、お母さんと駆け落ちするときに贈った花なんだよね？　憶えてる？」祖父はしばらく黙っていたが、いきなり「憶えとるよ」と言った。私は「そっか、そうなんだ」と言った。「お父さん炭鉱で働いてたもんね」「うん」「毎日汽車使ってたから田舎の家が線路のすぐ近くにあって、そのときお父さんと、お母さんと、亡くなった姫路の伯父さんと」「ああそうだな、おらと、あんたのおがさんどな、あの兄貴だな、馬鹿兄貴と」「そうなんだ、やっぱりそうなんだ、これ花屋さんの話だとアカガクアジサイって言って赤い品種だから、お父さんが贈ったやつとは」「うん、違うな、少し、色が違うな」「そうだよね？　でも、まあ、なんか、ちょっとね、いいかなと思って買ってみたんだけどどうかな？　いいと思わない？」「うん」父は頷いた。妹か看護師の人に了解を取るべきだとそのときになって気づいたが、本人がよいと言っているのだから構わないだろう。見舞いの品としては上等だ。私は少し背伸びをして、ベッドの枕元の、デジタル式の置時計と簡易な蛍光灯の設えられた出っ張りに鉢を置こうとした。しかしバランスを崩し、その体勢のまま病床へ倒れ込んでしまった。焦慮にかられたが、父は怪我など何もしていないようだった。「ああごめん」と言ってから立ち上がりかけた私の、抱えた鉢のあじさいの茎を父は掴んで一気に引き抜いた。茎とともに根の植わった土も引き出された。土が蒲団の上に散乱する。父はそれに厭わず目もくれずに、先端で色をつける花を口の中へ運んだ。それを見てはいたが土に気を取られ、手でかき集めたそれを薬局のビニール袋に入れる作業に没頭していたとき断続的な咀嚼音で父が一向に吐き出さないことに思い至った。唇をこじ開けようとすると父は頭を激しく振り、歯軋りをし、熱心に噛んだ。「いでぐねヨォ、おら」父はいなない、粘液のような涙を流した。開いた口からよだれにまみれた花びらがこぼれ落ちた。花びらからは父の口臭がした。噛み潰され繊維の裂けたそれらに、魚卵のような蘂の粒がまといついていた。「どしたんですか」後ろから聞き取りにくい声が聞こえ、振り向くとあっくんだった。あっくんは父ではなく私を見ていた。「土」とあっくんは言った。あっくんは私の隣に来ると蒲団の上で破砕した土の塊を手にすくい、「これ？」と言って顎でビニール袋を指した。頷くと、すくった土を袋へ入れた。私はそれを確認すると父に向き直ったが父は既にほとんどの花を呑み込んでいた。視点が足元に散乱する土に固定されていた。あっくんのことも私のことも見ていなかった。片付けに一〇分要した。

「あーあ」袋を結んだあっくんが溜息をついた。「ああ」あくびをしてから眼を擦りかけたが、土に触れたからか途中でやめる。「ごめんね」と私は言った。とんだ失態だ。後始末はあらかた済んだが、このまま無言で帰るわけにもいかない。妹が戻ってきたら、顛末を説明しなくてはならない。あっくんは土の入った袋を片手に持ち、パイプ椅子に座っている私を見下ろしたまま、「あの、失礼なんですけど」と怯みながら言った。

「あなたいったい誰なんですか？」

「は？」

「なんか、さっきからずっといますよね？」

「え？　いや、あの、妹の、妹というかあなたの、お母さんの、姉ですけど」

「はあ？」

「姉、です」

「あのー」あっくんは顔を顰めた。「さっき、母にトイレの入り口で訊いたんですけど。あの人誰、って。母さんの親戚なのって。そしたらなんか、知らない、とか言うし。いきなり『みーちゃんだよー』とか言って病室入って来たって。怖いから病院の人呼んで追い出してもらうって、受付まで降りていきましたけど。うちの母親、自分の姉とか兄とかの話とか、一度もしたことないんですけど。え、マジで誰？　俺も初めて会ったんだけど」

二人とも、完膚なきまでに黙った。耳鳴りがした。蝉の声に似ていた。

「私だって、あなたに初めて会ったよ」と私は言った。

そのとき、父がベッドから立ち上がった。私とあっくんは、そんな話を直前までしていながら、いざ彼が動き出すと二人で協力して押し留めようとした。あっくんは何度か「じいちゃん」と呼び掛けたが父はすべて無視し、突き飛ばすのか圧し掛かるのか中途半端な動作と力で私を退けて、カーテンを踏みつけながらその囲いの外へ出た。カーテンがサッシから外れ、地面に落ちた。掴まるものが中空にあるかのように父はしなびた両腕を突き出し、背を屈め腰を落として一歩ずつ進んだ。ゴムが緩んでいたのか、廊下に出る頃にはズボンが完全にずり落ちて足首から抜け下半身は襁褓だけになった。白桃のように色彩の淡い父の下半身は、そこだけは血色が良く、艶やかで、はりがあり、しかし身体のどこよりも力なく、不格好で、か細かった。喘ぎながら進む父は人間よりも

プロモーターの前で歩行テストを実行するロボットに似ていた。幾人かの患者達がこちらを見ていた。先程会った同室の女性が父を見て「あまがいさんッ」と叫んだが動く気配はなくそれ以外の人達は騒ぎもせずただ見ているだけだ。止めるのを諦め、怪我をする前にスロープに掴まらせようと先回りして手を取った。手は熱い。病人のそれとは思えない。あるいは病人だからか。妹を呼びにあっくんが廊下の端の階段を降りていくのを遠目に確認してから父に、父は理解しなかったろうがとにかく、戻ろうと言った。父は私を無視し、撚糸のような唾液に光る入れ歯を吐き出し、穴のような口腔から「うううー」と声を吐いた。そしていきなり廊下の中央で膝をついて屈み込むと、持ち上げた臀部が内側から勢いよく隆起していき、少しして強い悪臭が鼻先に立ち現われた。怪訝に思う間もなく、臀部と襁褓の間隙からは火山灰のような人糞がふきこぼれた。人糞は球形で硬く、細かく砕けながら床の上に散乱した。父が床に手をついたのを確認し、妹か看護師を呼ぶために走ろうとしたとき、そのひとつを踏みつけてしまった。靴底と硬いリノリウムの床が人糞で接着してバランスを崩し、私は今まさに、顔面から転倒しつつあった。排泄物に足を取られ、怪我で出社できなくなることを恐れていた。